

肉用牛（褐毛和牛）の産肉能力検定について

拝高欣弥・岩見照也・重森正美・林 明任

(熊本県畜産試験場)

HAITAKA, K., IWAMI, T., SHIGEMORI, M. and HAYASHI, A.

Evaluation for Performance of Meat Production for the Japanese Brown Cattle's Bull.

肉用牛の雄を若い月齢に一定期間飼養し、その間の飼料利用性、産肉能力など肥えい性能を調査することは改良の基本的手法であり、諸外国で行なわれているが、我国でも和牛が役用から肉用牛への転換を図るうえから、産肉能力の方法を究明することが急務とされ和牛産肉能力検定研究会が発足した。褐毛和牛についても検定法試案が作成され（195）この試案にもとづき1959年より3カ年直接検定を行な

いつ、方法について検討した。

試験（検定）の方法

材料は血統、体型、資質を考慮して選抜した褐毛和牛（雄）248～291日齢のもの14頭を用いた。方法は前記研究会試案にもとづき昭和39年度は実施したが、追試の過程で濃厚飼料の無制限自由採食から体重の1.2%制限給与え、検定期間を150日間から140日間へと昭和40年度以後は修正した。（第1表）

第1表 検定方法の比較

年度	検定日数	頭数	濃 厚 飼 料								粗 飼 料		季節	
			成 分	大麦	とうもろこし	ふすま	米ぬか	大豆粕	魚粉	NaCl Ca	共通のもの	異なるもの		
39	150	3	D.M 84.3%	%	%	%	%	%	%	%	各0.5	イタリアン青刈 ク 乾草	ソルゴー青刈	7～11月
			D.C.P 16.51	20	10	28	20	20	1	大豆青刈			10～3	
			T.D.N 70.73											エンシレージ
40	140	5	D.M 84.66%	%	%	%	%	%	%	各	とうもろこし 青刈	エンバク青刈	月 9～2	
			D.C.P 12.18									イタリアン若刈		
41	6	6	T.D.N 68.67	30	30	19	9	10	0	各 1	甘藷づる	メヒシバ乾草	9～2月	
												ローズグラス青刈		

成績ならびに考察

期間内の増体は1日当り増体量（D, G）采平均1.02±0.11kgをしめし、摂取養分量はN.R.C飼養標準（1963年—若雄牛発育）との比較でD.C.Pにおいて約150%、T.D.Nにおいて、約120%をしめた。また摂取養分総量中粗飼料のしめる割合は、43.8±4.8%であった。体型については胸囲、胸巾、坐骨巾の伸び率がよく、体高の伸び率は停滞する傾向を

しめた。

濃厚飼料の給与方法は黒毛和牛は給与時間制限による自由採食方式をとっており、褐毛和牛では体重による給与量制限法をとっているが、いずれの方法が真の肥えい能力を判定し得るかは今後の問題である。しかし比較判定の上からは同一の方法で実施するべきは当然であろう。（第2表）

第2表 検定成績要約

年度	頭数	検定日数	時 期	開始日齢	開始時体重	終了時体重	期 間 増体量	一日当 増体量	1日当飼料摂取量			1kg増体に要した養分量			NRC標準(1963)との比較(%)		
									濃厚飼料	粗飼料 (90%DM)	NaCl Ca	90%DM	D.C.P	T.D.N	90%DM	D.C.P	T.D.N
39	3	150	10～3月	248	268	429	161	1.07	4.15	4.61	7.97	0.97	4.84	116.0	191.8	118.4	
40	5	140	9～2月	248	292	425	133	0.95	4.18	3.72	8.20	0.83	5.33	104.3	144.5	109.9	
41	6		9～2月	291	328	476	148	1.06	4.66	4.77	8.70	0.79	5.87	124.9	152.9	128.1	
	14			266	321	448	145.4	1.02	4.38	4.36	8.365	0.84	5.46	115.6	158.2	119.5	

検定成績の判定として褐毛和牛では別表のように判定基準案が提示されているが、総合選抜の基準として不完全であり、1日当り増体量1kgを standard として、これ以上に達したものについて体型資質の検討を加え選抜すべきであろう。(第3表)

第3表 検定成績の判定基準
(褐毛和牛産肉能力検定研究会)

項目 \ 級	A 級	B 級	C 級
1日当り増体量	1.05kg 以上	0.95~1.04kg	0.94kg 以下
体型審査	優	良	可

